

支援センター名	浪江町体験活動ボランティア活動支援センター	
所在地	〒979-1521 福島県双葉郡浪江町大字権現堂字矢沢町 6-1	
連絡先	Tel 0240-34-2444 Fax 0240-35-5885 ホームページ http://www.town.namie.fukushima.jp/	

事業の概要とポイント

- ・浪江町内 6 地区（学区単位）ごとに地域ふれあい教室を設け、年に 8 回ずつ（津島地区 5 回）計 45 回実施した。各地区ごとに教室を運営するための運営委員 6 名（地区の老人会代表者、小学校長、ボランティア団体登録者、公民館分館長、行政区長、婦人会、社会教育委員等）を配置し、委員が中心となって、事業内容、日程の検討を審議してきた。
- ・子どもたち（幼児、小学生）と保護者、高齢者を中心に参加を呼びかけ、1 教室約 80 名の登録制としている。
- ・事業の内容は、伝承文化体験、農業体験、ボランティア活動、地域美化などで、異世代交流を深めながら実施している。

関係した学校・団体の名称

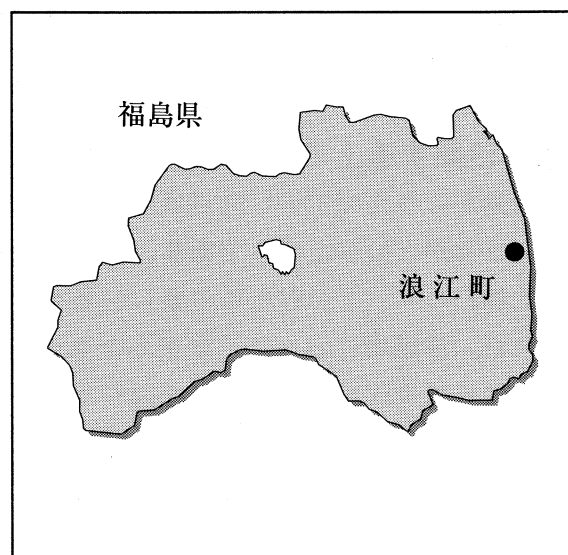
- ・浪江町立浪江、幾世橋、請戸、大堀、苧野、津島の各小学校児童と校長
- ・地区老人会、実年女性団体

地域の現況・特色

活動対象地域の浪江町の人口は 22,411 人である。

浪江町は、福島県の最東端「東経 141° 2' 49"」で県都福島市まで 75 km、東京までは 260km に位置し、伝統工芸品「大堀相馬焼き」で有名な町である。

また、11 月には請戸川に産卵のための鮭が遡上し、観光の名所として、多くの観光客が浪江町を訪れている。



企画から活動までの経緯

- ・学校、町との連携を図り、日程が重ならないように年次計画を立てて開催している。しかし、地域や学校行事で変更せざるを得ない場合には、各教室ごと6名の運営委員とともに教室の終了後、日程の調整や学習の反省、次学習の内容再確認を行っている。教室では、地域にあった学習内容を展開している。
- ・教室終了後の反省会では、なぜ参加者が集まらなかったのか、内容で異世代間交流ができたかどうかをその都度確認している。高齢者の参加が子どもたちの参加より多い地域や子どもと保護者が多い地域もあり、参加者が多い年齢層を考慮しつつ、学習で交流が図れるように内容を検討している。
- ・教室開催にあたり、教材等を準備しなくてはならない場合や運営委員が指導者として説明する場合は、事前に時間を設け、準備や学習会を行い運営委員の知識の向上にも努めている。

事例の展開内容（特色など）

事業内容は、農業体験、伝承文化体験、ボランティア活動、地域環境美化活動、自然体験活動等を実施している。

- ・5月には農業体験として、サツマイモの苗を植え、11月に実施した公民館事業「町民ふれあい健康ウォーキング」の際に収穫したサツマイモを町民へ提供した。
- ・ボランティア活動として、特別養護老人ホームを訪問。参加者が芸能を披露したり、手打ちうどんサービスを行った。また、一人暮らしの高齢者に、お弁当やおやつの配達を学習内容のなかに取り入れたところ大変喜ばれ、来年もお弁当を届けてほしいとの要望があった。
- ・地域美化活動として、あいさつ促進やごみ捨て防止の看板を作り、地域に設置した。また、夏には海開き前に2地区の教室が合同で海岸清掃を行い、子どもから高齢者までの70名が汗を流しながら真剣に活動した。いずれの活動においても地域の人々が一緒になって協力し合い、地域のために活動する姿はとてもいきいきしていた。

企画・活動する上でのポイント、留意点など

- ・活動するうえで工夫した点は、子どもから高齢者までがいかに融合（交流）することができるかということである。子どもたち向けの楽しい企画を行うと、高齢者が輪の中に加わらず、子どもたちの楽しむ姿をただ眺めながら話をしているという姿が見受けられた。高齢者にとって、子どもたちの楽しむ姿を見ることも嬉しいことだとは思いますが、やはり異世代が互いに交流を図りながら、いろいろな体験をし、豊かな心を育てていくことが重要なことである。そのため、高齢者も一緒になって心を通わせることのできる新しい内容を常に検討している。
- また、子どもたちの参加が少ない地域では、運営委員長、学校長が積極的に呼びかけを行った。朝の朝礼の時間を利用し、「ふれあい教室」の活動内容の紹介や学校の掲示板

に写真を展示し PR 活動を行った。結果として、次の学習会には参加者が倍に増えた経緯があり、PR 活動の大切さを実感した。

- ・事業成功の要因は、回数を増すごとに子どもたちと高齢者の距離感が少しずつなくなってきたところである。いつも来ている子どもが来ない日は「風邪でもひいたのかな」と心配する高齢者もあり、地域内で会ったときに「次回の教室には行こうね」と約束をする参加者もいた。担当として、地域づくりをコーディネートする立場でありながら、いつのまにか参加者同士が世代を越えて自然な形で人と人とのつながりを形成しているところに驚きを感じている。

また、伝承文化体験では、高齢者も昔を思い出しながら夢中になって取り組み、子どもたちに一生懸命教える高齢者の姿は、次世代へ受け継いで欲しいという願いも込められているようであった。

評 価

- ・完全学校週5日制となり、子どもたちの参加とともに親子、家族ぐるみでの参加が増えてきた。一方、高齢者の参加が増え、子どもたちの参加が減少する地域もあった。実際に統計をとってみると週末に家でゲームをして過ごす子どもが多かったのも、学校、運営委員、地域の方々に協力を得て呼びかけを行った。地域の子どもたちは地域で育てるとの熱意が伝わったせいか、その地域での子どもたちの参加人数を増やすことができた。
- ・これからの課題としては、子どもたちの参加を促すことや世代間の心と心が繋がり合えるような学習内容の検討を欠かさずに行い、学校内外だけでなく、新聞記事掲載や広報誌での幅広い PR 活動に取り組んで行きたい。そして、いつでも誰でも自由に参加できるような教室づくりをしていきたい。

【活動風景】



小正月用稲穂づくり



餅つき体験